

<取組と成果のポイント>

- ・ 中心発問と評価の在り方に着目した道徳科の授業づくりに取り組んだことで、「道徳科の授業は好きだ」と考える生徒の割合が増加した。
- ・ 行事や体験活動と道徳教育の関わりを意識し、家庭や地域との連携を生かした実践に取り組んだことで、自らの経験と道徳科の内容との結び付きを実感する生徒の割合が増加した。
- ・ 全校一斉での道徳授業公開や学校だより・ホームページでの情報発信に取り組んだことで、「学校は、道徳科の授業や行事を通して、思いやり・やさしさなど豊かな心を教えてくれる」と考える保護者の割合が増加した。

研究推進校事業報告書

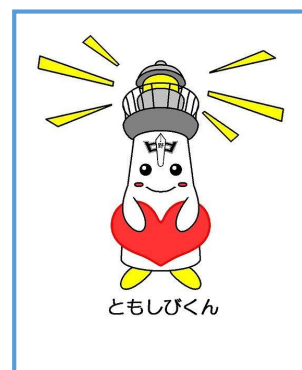
1 研究推進校の概要

学校名	所在地	電話番号	生徒数
美浜町立野間中学校	知多郡美浜町大字野間字大坪 59	0569(87)0121	196人

本校の位置する美浜町は、温暖な気候と豊かな自然に恵まれ、のどかな風景が広がる穏やかな魅力をもった町である。校区には、縁結びの名所である野間埼灯台や恋の水神社、歴史観光名所である野間大坊の他、南知多ビーチランドなどがある。

本校は、10学級（特別支援学級4学級を含む）、全校生徒196名の小規模校である。まじめで素直な生徒が多く、学校の教育活動に協力的な保護者にも恵まれている。

本校のマスコット・キャラクターである「ともしびくん」は、平成21・22年度に道徳教育の研究指定を受けた際、生徒のアイデアを基に考案されたものである。船舶航行の道しるべである野間埼灯台をモチーフにしており、目標を確認しながら人間として力強く成長して欲しいという願いが込められている。



2 研究課題

- (1) よりよい生き方を実践する力を育む道徳科の授業づくり
 - ・ 外部講師を招へいた計画的な研修による道徳授業の指導方法の工夫・改善
 - ・ ねらいに迫る中心発問と生徒の学習状況を的確にとらえる評価の在り方を学び合う公開授業
- (2) 家庭・地域との連携による道徳教育の推進
 - ・ 学校行事や地域での体験を生かす道徳年間指導計画の作成
 - ・ 学校公開日や行事等での家庭・地域との連携、野間中だよりやホームページによる情報発信

3 研究主題とその設定理由

「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実
—家庭・地域との連携を生かした道徳教育の推進—

本校では、平成30年度～令和2年度、「他者との関わりから豊かな心を育成する道徳授業の工夫」を主題とし、校内現職教育研究に取り組んだ。本時のねらいを達成するための発問の工夫、多様な

考えを引き出し、他者の考えから自分の考えをより深められるような授業の工夫についての実践を重ね、振り返りシートを活用した評価の在り方についても理解を深めることができた。

しかし、令和5年度に行った全国学力・学習状況調査の質問紙調査では、「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を合わせた回答は59.2%（全国比-18.4ポイント・県比-16.5ポイント）、「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか」という質問に対し、同77.4%（全国比-8.9ポイント・県比-4.6ポイント）という結果が見られ、いずれも全国平均・県平均を下回った。

また、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を合わせた回答は40.8%（全国比-23.1ポイント）という結果が見られた。社会貢献や郷土愛に対する肯定的な回答が少ない点は、過去の現職教育研究の際にも見られた本校の特徴である。

こうした結果について、校内の現職教育推進委員会では、野間中学校の生徒の様子について、「明確な正解のない道徳の授業について、自分の意見を表明することに消極的になってしまう」「社会のつくり手の当事者という意識を高めたい」という意見が出された。

そこで、過去の研究の成果と課題を基に、「考え、議論する道徳」につながる指導方法・評価方法の在り方の工夫・改善に取り組み、教員の指導力向上を図る。また、現在ある各行事や学校公開（授業参観）、地域交流・国際交流などの取組について、道徳教育の全体計画・全体計画の別業・年間指導計画の中での位置付けを再確認し、家庭・地域との連携を図りたいと考えた。

4 研究の概要

(1) 研究仮説

- ・「考え、議論する道徳」の授業づくりを通し、指導方法・評価方法の在り方の工夫・改善に取り組むことで、生徒は、よりよい生き方を実践する力につながる学びを得ることができるだろう。
- ・家庭や地域と連携した教育活動を展開することで、地域や社会をよりよくするために何ができるか主体的に考え、行動しようとする意欲を高めることができるだろう。

(2) 研究組織

校長—教頭—現職教育推進委員会（※印は現職教育推進委員）—現職教育全体会

【1年生部会】

※教務主任・※1年学年主任（保健主事）・1年A組担任・1年B組担任・※特別支援学級主任

【2年生部会】

※2年学年主任（生徒指導主事・2年B組担任）・※現職教育主任（道徳教育推進教師・2年A組担任）特別支援学級担任・2年副担任

【3年生部会】

※校務主任（特別支援学級担任）・※3年学年主任（進路指導主事）

3年A組担任・3年B組担任・特別支援学級担任・特別支援学級副担任

【各学年部会で取り組む共通事項】

- ・毎学期、全ての学年部会による研究授業を行う。
- ・公開授業前に、現職教育推進委員が中心となり、各学年部会で内容を協議する。

- ・公開授業シートを作成し、全職員で共有する。
- ・研究授業後に、授業参観シートを活用し、授業の振り返りを行う。

(3) 研究構想図



(4) 研究の手立て

【よりよい生き方を実践する力を育む道徳科の授業づくり】

校内での授業研究の取組に加え、外部講師による計画的な研修を行う。道徳の授業を行うにあたって必要な教材研究や指導・評価の方法について学ぶ機会を設けることで、教員の道徳の授業力の向上を図る。外部講師は、道徳教育に造詣が深く、過去の校内現職教育研究で招へい実績のある大学教員へ依頼する。

【家庭・地域との連携による道徳教育の推進】

本校の学校教育目標である「自立・探究・礼儀」と現在の生徒の実態を踏まえ、道徳教育の全体計画・全体計画の別葉・年間指導計画を丁寧に再検討する。このことで、各教科や特別活動、総合的な学習の時間、学校行事や地域との関連付けを確認するとともに、家庭・地域との連携を推進し、道徳教育の一層の充実を図る。

学校公開（授業参観）において道徳科の授業公開を実施し、家庭・地域との連携を図る。とりわけ、6月第3土曜日に実施する「ふれあい学級」では、全学級での道徳科の授業公開を計画する。また、家庭・地域と連携した次に挙げる体験活動については、授業で高めた道徳性を実践する場として、道徳教育の全体計画・全体計画の別葉・年間指導計画において関連を示す。

- 1年生…海岸清掃・職場体験・パラリンピック教育・福祉実践教室
- 2年生…キャリア教育講座・座禅体験
- 3年生…国際交流
- 全学年…ふれあい学級（道徳授業公開）・野中祭・資源回収・地域ボランティア

加えて、これまで交流を行ってきた日本福祉大学との連携を強化し、道徳教育に関連する講演会や教材の開発等の取組を模索する。

(5) 本事業成果の検証方法（目標達成状況等把握のための方法）及び成果の普及

研究授業後の研究協議会等、道徳に関する意識調査（6月・12月）により、本事業の成果を検証する。研究内容及び成果については、愛知県道徳教育総合推進サイト「モラルBOX」に公開し、愛知県道徳教育パワーアップ研究協議会に参加・発表する。

5 研究計画

月	実施内容
4	<ul style="list-style-type: none"> ・現職教育推進委員会①（校内研究組織発足・主題研究（道徳科）の方針・研究の手立て等検討） ・道徳教育の全体計画・全体計画の別葉・年間指導計画の検討 ・現職教育全体会（研究目的・内容の周知と共通理解）
5	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究①②③
6	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回意識調査（県教育委員会作成） ・道徳科授業参観「ふれあい学級」の実施（保護者への道徳アンケート） ・地域との連携を生かした体験活動（地域講師 知多南部消防組合） ・共同教材研究型現職研修会① 外部講師の指導 至学館大学 前田治氏 道徳科の授業づくり・ねらいに迫る中心発問
7	<ul style="list-style-type: none"> ・現職教育推進委員会②
8	<ul style="list-style-type: none"> ・現職教育推進委員会③
9	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究④ ・地域との連携を生かした体験活動（地域講師 日本福祉大学 安藤佳代子氏） ・共同教材研究型現職研修会② 外部講師の指導 至学館大学 前田治氏 道徳科の授業づくり・ねらいに迫る中心発問・道徳科の評価
10	<ul style="list-style-type: none"> ・地域との連携を生かした講演（地域講師 日本福祉大学 藤井啓之氏）
11	<ul style="list-style-type: none"> ・現職教育推進委員会④ ・授業研究⑤ ・地域との連携を生かした体験活動（地域講師 丹内心悟氏） ・共同教材研究型現職研修会③ 外部講師の指導 至学館大学 前田治氏 道徳科の授業づくり・ねらいに迫る中心発問・道徳科の評価
12	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回意識調査（県教育委員会作成） ・地域との連携を生かした講演（地域講師 日本福祉大学 藤井啓之氏） ・地域との連携を生かした体験活動（地域講師 日本福祉大学 安藤佳代子氏） ・授業研究⑥⑦
1	<ul style="list-style-type: none"> ・研究のまとめ

6 これまでの取組と成果

＜校内研修での取組＞

(1) 共同教材研究型現職研修

至学館大学の前田治氏をお招きし、道徳の授業づくりについての現職研修会を行った。第1回の研修会（6月）では、資料『吾一と京造』（山本有三 作）を読み、「どの場面を、生徒たちと一番し合いたいか」、学級・学年の生徒一人一人の顔を思い浮かべながら、中心発問とねらいを考えた。

また、以下の点を意識した授業づくりの手順について、御教授いただいた。

授業づくりの手順

- 1 教材を読む。
- 2 登場人物を書き出し、誰を追うのか考える。
- 3 教材を場面で区切る。
- 4 どの場面を、生徒と一番話し合いたいのか考える(中心発問)。
- 5 中心発問を考える。
- 6 生徒の顔を思い浮かべ、発言を予想する。
- 7 内容項目(ねらい)は何になるか考える。
- 8 学習指導要領は、どこまで求めているか確認する(ねらい)。
- 9 方向付け・基本発問・自己を見つめる発問・説話を考える。



第2回の研修会(9月)では、資料『足袋の季節』(中江良夫 作)を読み、先述の授業づくりの手順にしたがって中心発問とねらいを考えた。第1回と同じようにグループに分かれて教材研究を進めた。同じ資料を読んでも、生徒に最も問いかけた内容は、教員一人一人様々であった。

研修では、各自の考えた中心発問とねらい、その根拠について、お互いの考えを聞き合った。最後に改めて自分の考えを振り返ってみると、教材に対する理解の深まりを実感することができた。また、生徒の学習状況を丁寧に捉える評価の在り方について、何を評価するのか、どのように評価するのか具体例を交えて御教授いただいた。

生徒の成長を感じる学習状況について把握をし、個人内評価する。

- ・道徳的価値を理解し、自分なりの考えをもったかどうか。
 - ・多面的・多角的な見方へと発展させているかどうか。
 - ・理解した道徳的価値を自分との関わりで捉え、深めているか。
 - ・自己(人間として)の生き方を考え、深めているか。
 - ・学習に対して真剣に取り組んでいるか。
- 学習状況を評価する。

方法:個人カルテへのメモ、ポートフォリオ評価(ワークシート・事後感想)

第3回の研修会(11月)では、第1回、第2回の研修内容を踏まえ、指導案の作成について御指導いただいた。また、家庭や地域との連携を生かした道徳授業の在り方についても、今年度の取組を踏まえ、今後へ向けての御助言を頂いた。

(2) 授業の質を高める取組

今年度は、教員一人一人に前田治氏の著作『道徳を凶解する』を配付し、現職研修の内容とともに、授業づくりの際の参考とした。また、各学年の研究推進委員が中心となり、学年の実態と学校・地域行事を踏まえ、教科書のどの教材をいつ学習すると効果的であるのかを考え、年間指導計画を定期的に更新した。

校内での公開授業では、「公開授業シート」を作成し、全職員で共有した。シートは、極力簡潔なものとし、授業のねらいと中心発問に焦点をあて、授業を参観できるようにした。参観する際には、「授業参観シート」に気付いたことを記録し、授業後の振り返りと全職員での共有に役立てた。

また、生徒の学習状況を的確に評価するために、「振り返りシート」を活用した事後感想の記入の積み重ねを全校で行った。

(3) 「ふれあい学級」での道徳授業公開

6月15日(土)の「ふれあい学級」では、全校で道徳授業公開を行い、多くの保護者に御参観いただいた。教室前には、本時の教材文のプリントを置き、「希望と勇気」「友情、信頼」「自然愛護」などについて、生徒とともに考えていただく時間となった。

子どもたちに主体的に考えさせる時間を多く
とってほしい。また、命の大切さで一生懸命に
取り組む姿勢で、良かったと思える。
その後の関係性についての授業は、最後の目的意
図も自分の決断に後悔しないよう、先生の下には自分
から身にしみるものを感じました。ありがとうございました。

保護者からお寄せいただいた感想



「ふれあい学級」(全校での道徳授業公開)

<1年生の実践>

地域との連携を図り、「道徳教育」に生かす工夫

- ① 「福祉」をキーワードとし、地域との連携を図る。日本福祉大学と連携し、車いすバスケットボールやボッチャの体験などのパラリンピック教育を依頼する。また、美浜町社会福祉協議会と連携し、福祉実践教室を行う。
- ② 体験前後にパラリンピックに関連する教材を用いた授業を行う。
- ③ 地域での体験活動と知識を結び付け、道徳的实践力を育む。

(1) 授業の様子(内容項目：A 希望と勇気、克己と強い意志)

教材文「夢への挑戦 パラカヌー」を読み、くじけそうになる瀬立選手の心情を共感的に捉え、困難や失敗を乗り越えて自らの掲げた目標に着実に到達しようとする大切さについて、自らの経験と重ねて考えを深めた。

グループでの意見交流では、「すぐに自分にできないと決めつけずに1日少しずつでもいいから、夢や目標に向かって努力したい」「私は、夢に向かって、自分に負けないようにしていきたいなと思った」などの考えが出された。



自分のこととして考え、意見交流を行う

(2) パラリンピック教育

9月・12月に日本福祉大学と連携し、パラリンピック教育を実施した。車いすバスケットボール選手2名を講師に迎えた際には、実際にバスケットゴールに向かってシュートをしたり、ゲームを行ったりした。

体験前には事前学習の視点について日本福祉大学(スポーツ科学部)准教授安藤佳代子氏より御助言を頂いた。教材『I'm POSSIBLE (アイムポッシブル) 日本版』を使用し、「バリアフリーを実現する」とはどういうことかについて、「気づきにくいバリア」や「意識上のバリア」という言葉の意味を確認しながら考えた。



パラリンピック教育(車いすバスケットボール)

(3) 道徳講演会「海の豊かさを守ろう」

1年生は、毎年、地域にある若松海岸の清掃を実施している。そこで、日本福祉大学（教育・心理学部）教授の藤井啓之氏に依頼し、「海の豊かさを守ろう」をテーマに道徳講演会を実施した。内容は、海洋汚染の現状や微細なプラスチックが生態系に与える影響を知ること、海岸清掃の取組と世界規模の環境問題をつなげるものであった。事後の感想用紙には、「私たちの拾ったゴミの分だけ、海の生命を救ったという実感がもてました」「レジ袋などのプラスチックのごみを一つでも多く減らして、自分たちの住んでいる町の海をきれいにしていきたいです」「今、自分自身が地球環境をよりよい方向に変えていくためにできることを考え、行動していきたいです」など、地域や社会に目を向け、何かできることを実践しようとする思いが記されていた。また、実施後は、藤井氏の協力の下、講演会で使用したスライドをインターネット上で閲覧できるよう、URLを保護者に広報し、講演内容の共有を図った。



<2年生の実践>

地域との連携を図り、「道徳教育」に生かす工夫

- ① 日本福祉大学と連携し、インターンシップ生が授業に参加する。本時の教材を事前に配付し、通読を依頼する。インターンシップ生が意見表明できる場を設けるとともに、授業に参加しての振り返りを書いてもらい、生徒が多様な価値観に触れる一助とする。
- ② キャリア教育講座と関連させ、しなやかな心（レジリエンス）を育むとともに、将来の社会参画への意欲を高める道徳講演会を実施する。

(1) 授業の様子（内容項目：A 希望と勇気、克己と強い意志）

教材文「へこたれない心」を読み、長嶋茂雄さんの生き方について学ぶことを通して、前向きに生きようとする強い意志について考えた。本時では、日本福祉大学の学生が授業に参加した。学生の皆さんは、価値への方向付けの場面では、自らの経験を生徒に伝え、長嶋茂雄さんの生き方に共通する姿の深層を考えるグループでの話し合いでは、必要に応じて、生徒の意見を引き出し、深める役割を担った。多面的・多角的に考える授業を展開する上で大きな意味があった。授業へ参加した学生の皆さんからも、「授業の計画からまとめまで、どのような流れで行っているのかを知る貴重な機会となった」「教職への関心がより深まった」との感想が寄せられた。



(2) 道徳講演会「未来を生きる中学生の皆さんへ」

2年生は、「総合的な学習の時間」にキャリア教育として、上級学校訪問やものづくり体験等を行っている。10月には、トヨタ自動車より15名の講師の方を招き、技能五輪メダリストの方の講話やプログラミングとはんだ付けの実演、マイネームライト作りの体験を行った。



例年実施しているこうした取組に加え、生徒の将来を見据え、「困難にへこたれず向き合う心」を育む取組を実施したいと考えた。そこで、日本福祉大学（教育・心理学部）教授の藤井啓之氏に依頼し、「未来を生きる中学生の皆さんへ」をテーマに道徳講演会を計画した。生徒の感想用紙には、「昨日、たまたま進路のことや夢のことで家族ともめてしまい、進学したくないと思ってしまった。今回のお話から、自分の軸をもつこと、幅広く学習することの大切さを学ぶことができた」「自分の将来の夢についてもっと考えてみたい」「視野をもっと広くし、自分ができることを探していくことが大切だと思った」などの内容が記されていた。道徳講演会は、全学年の保護者にも参加を募り、講演の内容について家庭でも話題にさせていただくことを図った。

<3年生の実践>

家庭（保護者）・地域との連携を図り、「道徳教育」に生かす工夫

- ① 本時の前に、学級通信で本時の概要を周知する。本時の教材を事前に配付し、通読を依頼する。その上でアンケートを実施し、本時の中で紹介する場を設定する。さらに、本時の様子や生徒の振り返りを保護者に紹介する。
- ② 地域貢献の意識や郷土愛につながる体験活動を設定する。

(1) 授業の様子

第2回研修会で学んだ教材文「足袋の季節」（内容項目：B 思いやり、感謝）の授業では、生徒から「おばあさんが私に伝えた心は、やさしさの影響力だと思う。優しいおばあさんの行動で、私はおばあさんを思い浮かべていろいろなことに踏ん張り、がんばることができたと思う」等の感想が出された。また、教材文「家族の思いと意思表示カード」（内容項目：D 生命の尊さ）の授業では、事前に教材文を保護者の方々に配付し、通読を依頼した。授業の最後に、「我が子には、ただただ生きていてほしい。それだけ命は尊い。大切に大切にしてほしい」「大切な人を大切にできる大人になってほしいし、あなたのことを自分のことより大切に思っている私がいることを忘れないでほしい」など、お寄せいただいた保護者の感想や思いが紹介された。生徒は、「僕は脳死の状態になったら臓器提供をしようと考えていましたが、保護者の思いを聞き、決められませんでした」「今の命を大切にしていきたい」との考えを振り返りシートに記入し、生命の尊さについて、より考えを深めることができた。



保護者に協力いただく道徳科の授業

(2) シンガポール・ニーアン中学校との国際交流

令和6年度、美浜町とシンガポールでの相互訪問の国際交流が、5年ぶりに実施された。11月8日（金）、シンガポール・ニーアン中学校の生徒の16名が来校した。その際、美浜町在住の丹内心悟氏に依頼し、「スポーツ鬼ごっこ」を通し、3年生とシンガポールの中学生との交流を企画した。丹内氏は、過疎化の進行する美浜町の現状を踏まえ、スポーツを通じて交流人口を増やし、人の顔が見えるようなスポーツツーリズムの創造を目指した活動に取り組んでいる。

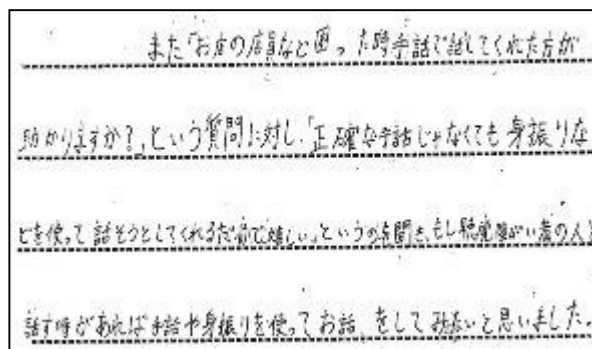


「スポーツ鬼ごっこ」を通して国際交流

「スポーツ鬼ごっこ」は、チーム戦で行うので、チームワークの大切さや自ら意見を発信すること、相手の意見を聴くことの大切さを学ぶことができる。英語やジェスチャー、アイコンタクトを駆使し、全員で楽しいひとときを過ごすことができ、生徒からは「また交流したい」、「言語の壁などないと感じたすばらしい交流会だった」などの感想が出された。

(3) ボランティア活動

今年度、美浜町では、青少年ボランティア福祉体験学習事業として、サマーボランティアスクールが実施され、本校からも多くの生徒が参加した。さらに、地域の盆踊り大会や敬老会の行事の運営ボランティアへも積極的な参加が見られた。事後の感想からは、自分たちが参加したことが運営の一助になったことを実感し、充実感を得られたことが伺えた。



手話ボランティアに参加した生徒の感想

7 研究の評価

(1) 研究の成果

以上の実践の成果について、6月と12月に実施した生徒アンケートの結果を踏まえて検証したい。

ここでは、29の質問項目のうち、実践との関わりが深いと考えられるものについて取り上げる。

まず、「道徳科の授業は、好きだ」という項目について、「そう思う」「どちらかと言うとそう思う」という肯定的な回答が約10.7ポイント(6月78.6%、12月89.3%)向上した。毎時間の道徳科の授業に関わる教員が、共同教材研究型現職研修で学んだ内容を大切に、丁寧な準備を行い、授業にのぞんだ結果と考えられる。本校では、学年職員がローテーションし、担任する学級以外の学級でも道徳の授業を行っている。教材文を読み合い、発問について教員同士が意見を出し合う姿が多く見られるようになったことも、大きな成果である。

「道徳科では、他の人の考えを聞きながら、自分のことについてよく考えている」という項目については、肯定的な回答が、約13.9ポイント(6月82.1%、12月96%)向上した。ねらいに迫る中心発問を軸とし、コの字型や円形の座席配置、ICT機器を活用した意見共有の工夫など、授業改善に取り組んだ成果と考えられる。研究主題の設定理由の中で述べた、本校の道徳科の授業にあった課題に対し、改善を図ることができた。

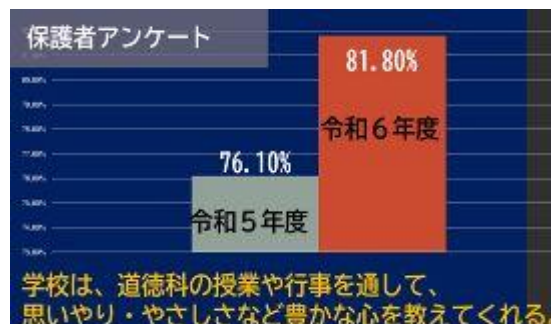
また、「道徳科で学習したことを生活の中で思い出す」という項目については、肯定的な回答が約11.4ポイント(6月52.4%、12月63.8%)向上した。生徒自身が自らの経験と道徳科の内容との結び付きを実感できるよう意識し、年間指導計画の定期的な見直しを行ったことが背景にあると考えられる。

研究主題の設定理由の中では、社会貢献や郷土愛に対する肯定的な回答が少ないことも本校の課題としてあげ



た。今回のアンケート調査では、「自分の住んでいるところにはよいところがあると思う」という項目は、約4.2ポイント（6月85.1%、12月89.3%）、「地域の行事に進んで参加している」という項目は、約10.1ポイント（6月47.6%、12月57.7%）、「家族や多くの人の支えや助け合いで社会が成り立っていることに感謝し、自分も助けようとしている」という項目は、約4.8ポイント（6月85.1%、12月89.9%）向上しており、この点でも、家庭・地域との連携による道德教育の取組による成果が指摘できる。

最後に、12月に実施した保護者アンケートの結果では、「学校は、道德科の授業や行事を通して、思いやり・やさしさなど豊かな心を教えてくれる」の設問に対し、肯定的な回答が81.8%となり、昨年度の結果（76.1%）を上回った。全校一斉での道德授業公開や学校だより・ホームページでの情報発信についても、一定の成果が認められる。



(2) 今後の課題と取組

こうした結果を踏まえ、次の二つの観点から、今後もよりよい生き方を実践する力を育む道德科の授業づくりと家庭・地域との連携による道德教育の推進を継続していきたい。

第一に、少経験者の割合が多い本校の現状も踏まえ、現職教育を中心とした授業改善の取組を大切にしていく必要がある。先の生徒アンケートでは、「自分にはよいところがあると思う」という項目に対し、12月の調査では、75.2%の生徒から肯定的な回答を得た。より多くの生徒が自分のよさに気付くことができるよう、生徒の学習状況を丁寧に捉える評価の在り方について、今回の研修で学んだ内容を生かし、研さんを重ねていきたい。

第二に、今回の研究を通して生まれた日本福祉大学との連携を始め、家庭・地域との連携を持続可能な形で今後も継続する。日本福祉大学との連携では、道德講演会や道德科の授業への学生の参加に加え、地域の自然や文化をテーマとした地域教材の開発にも挑戦したいと考えている。